PHP
No.787 12月号

目次

◆特集

悩みから抜け出す

心がぶれない生き方

世のため、人のために……榎木孝明 16

インタビュー 進まなければ、はじまらない……岩崎恭子 21

自分を信じ、自分に期待する……下重暁子 25

「遊びをすべて仕事にしろ」……金丸弘美 28

簡単に「癒し」なぞ訪れない……金子稚子 31

【仏教に学ぶ】戻るべき場所に帰る……草薙龍瞬 34

特集

「遊びをすべて仕事にしろ」

好きになったものを
徹底的に追求してみよう。
そう考えて活動した
金丸さんが辿り着いた
「ほんとうの仕事」とは……。

金丸弘美（食環境ジャーナリスト・食総合プロデューサー）
地域に根付いた食文化を再発見し、各地の元気を実践の場から発信。行政機関のアドバイザー、コーディネーターなどをはじめ、学校での授業、実践までを行なっている。近著に『実践！田舎力―小さくても経済が回る5つの方法』（NHK出版）。

仕事と趣味をわけない

「いつも元気な理由はなんですか？」と、よく尋ねられる。そのとき「元気な人に会うからです」と答えている。

二十代のころから、自分の好きな活動や仕事をしている人たちを訪ねていった。「会いたい人に会いに行く」と決めていた。元気の源だ。それは今でも変わらない。

出版社に就職をして間もない頃、仕事で人間関係がうまくいかないことがあると、いつも祖父・松本松太郎の言葉を思い返していた。

「人は誰でもいいところを一つは持っている。そのいいところをもらいなさい。そうすればお前は幸せになれるだろう」

その頃、興味があったのは、映画、舞台、音楽、雑誌などの表現の仕事。舞台も映画も、ほぼ毎週のように観に通った。

なかでも関心をもったのが、タモリさんの

「今夜は最高！」や「笑っていいとも！」のブレーンとして知られた作家・演出家の高平哲郎さんだった。

高平さんの関わる舞台を観に行くうちに知りあいとなった。思い切って出版社を辞めて、高平さんの事務所に入り仲人にまでなっていただいた。高平さんの編集術や演出を通して自己を表現していく姿に憧れていた。

高平さんのもとで雑誌編集の仕事に携わるようになった。そのとき言われたのが、「いままで仕事と遊びを分けてきただろう？　遊びをすべて仕事にしろ。好きなことは自分で書け」だった。

確かに、それまではサラリーマンで、仕事は仕事、好きな舞台や映画は趣味とわけていた。ほんとに愛せるものに向き合っているだろうかと、改めて思ったものだ。

だからと言って高平さんのように好きなことを表現するというのはなかなか難しい。

そんな頃、決定的なことが起こった。それは結婚して子供が生まれたことだった。

保育園に子供が上がると送り迎えをするようになった。義姉が妻に「可愛い子どもに接することができるのは今だけ。だから金丸君に園の送り迎えをやってもらいなさい」と話したらしかった。

あるとき保育園に行くと保母さんに「お子さんのお肌が綺麗ですね」と言われた。「子

どもの肌が綺麗なのは当たり前でしょう」と答えると「とんでもない。今は、アレルギーやアトピーが多く、肌が荒れている子供が多いんです」とのことだった。

そのことを妻に話すと、実は彼女が高校生のとき重度のアトピーだったという。髪は白髪で、肌は黒く、医者からは20代過ぎまでは生きられないと言われたという。

原因は、鹿児島から大阪に家族が引っ越し、環境と食生活の激変から体に異常をきたしたようだ。その妻の体を変えたのは、バランスのとれた食生活に改善をすることをアドバイスした栄養士さんたちとの出会いだった。やがて体調を回復し、結婚もでき、元気な子供も産むことができた。

今の自分に「迷いはない」

アトピーのことが知りたくて、多くのお医者さんや親子にあった。アトピーは、野菜不足、菓子類やジュース類が多い、運動不足、など現代の偏った食生活や、生活環境の激変などから生まれていることを知った。

そこから、農村や漁村へ行き、健康な食を育む地域や人に会う全国巡りが始まった。そして、出会った元気な人たちと、農家・料理家・栄養士などを繋ぐ食のワークショップを各地で開くようになった。

参加型で地域の食材で料理を創る。美味しい。楽しい。要望のあった各地域や学校でも開くようになった。

地域の食材のなりたちを調査しテキストにし、それを料理家・農家などと連携して、みんなで料理を食べる。地域の豊かさを見た目で理解をして、おいしさと健康に繋ぐというものだ。今の活動に迷いはない。テーマは「健康な未来を子供たちに手渡すこと」になった。僕のほんとうの仕事が始まった。